

アル・アダイル地域の予備調査

藤井秀夫*・井 博幸*

はじめに

1990年3月、来日したイラク考古総局の発掘・調査局長 Taha Munir 博士は、イラクにおける多目的ダム建設に伴う、発掘調査が開始されつつあるとの情報をもたらした。この中には、テル・グッパ〔藤井編 1981〕との関係で、かねてから我々が注目していたハムリン盆地に北接するアル・アダイル al-Adaim 地域が含まれていた。そこで我々は、出来る限り速やかに現地調査をしたい旨を同博士に口頭で伝えと共に、イラク考古総局に現地調査と発掘調査の可能性を文書で打診したところ、予想外に早く、4月の下旬にはイラク考古総局から、アダイル地域での発掘調査の許可が交付された。同時に、このプロジェクトはダム建設計画に伴うもので、向う3年間の期限であることも確認した。

このような経緯で藤井と井は、今年度は現地のより正確な情報を得るための予備調査として、国士舘大学当局の理解を得て、6月6日から6月20日まで滞在し、この間に5日間の現地調査を行った。今回の短期調査は水没予定地域内に存在する遺跡の把握と、発掘予定遺跡の選定にあり、本調査は来年度以降に、イラク考古総局との合同調査で実施する計画である。以下に今回の予備調査の概略を述べる。

水没予定位置と範囲 ダムの建設地は東経 $44^{\circ}30'$ 、北緯 $34^{\circ}31'$ に当たり、バグダッドの北約 150 Km に位置する。すでに調査を行ったハムリン盆地のテル・グッパの北西約 70 Km 付近が今回の水没予定範囲である(図1)。計画によれば、水没範囲は北西～南東方向 50 Km、最大幅は約 10 Km で、最高到達水位は標高 150 m であったが、最近 143 m に変更されたとも伝えられる。

付近の地形・景観と集落 メソポタミア低地とアッシリアの微高地を限るハムリン山脈は、部分的に数百 m の高さに達し、約 300 Km にわたって南東―北西方向に連続する。ハムリン山脈とザグロス山脈との間には、幅 20～50 Km の比較的平坦な平原地帯が展開しており、メソポタミア低地と異なる景観を呈する。この平原を開析して、ザグロスの高山地帯に源を発する大小の河川が南西流しティグリス河に合流する。それらは南からディヤラ、アダイル、小ザブ、大ザブ川などである。

アダイル川はトゥズ Tuz から南西流するトゥズ川と、スレマニア付近の山岳地に源流をもつ水量の豊かなダーコーク川 Dakoq (Tauq ともいう)、およびキルクーク南西の平原の水を集めるズゲイトゥーン川 Zugeitun が、ダム建設地付近で合流し、メソポタミア東部の平原地帯を流れ下る。なおトゥズ川の一支流は南および南東流してナリン川と合流、すでに調査が完了したテル・グッパ付近に達する。

トゥズ川の水量は少なく、広い氾濫原と礫の堆積が顕著であり、河岸段丘上では堀抜き井戸を伴うモーター灌漑により、夏季には野菜栽培が行われている。ダーコーク川の水量は豊富ではあるが、台地を開析・侵蝕しつつ

* 国士舘大学イラク古代文化研究所

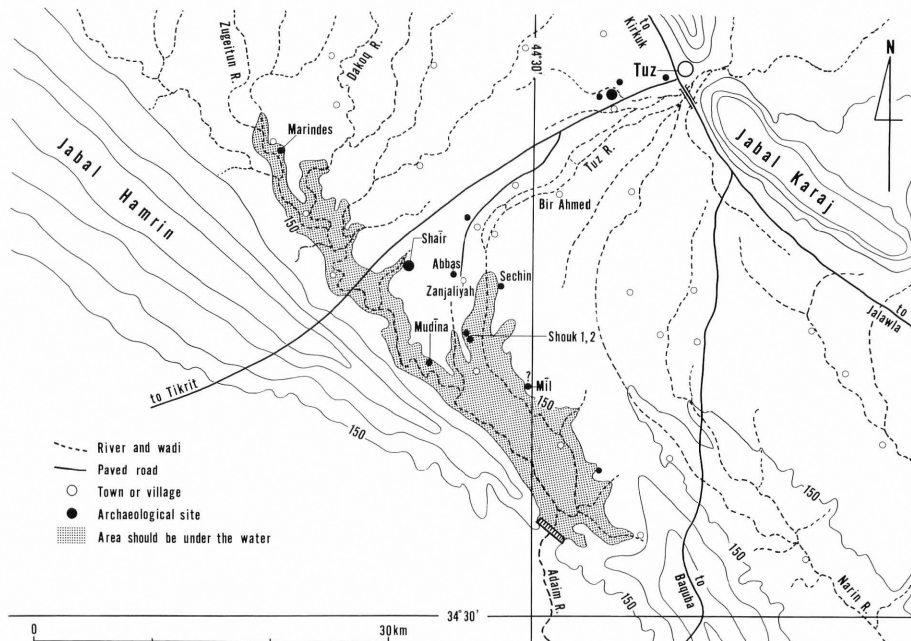


図1 アル・アダイム地域の遺跡分布略図

あるため、狭く高い段丘が形成され、野菜栽培には適さない地形である。ただ砂質の氾濫原に沿ってタマリスクの群生が連続する。ズゲイトゥーン川流域もダーコーク川と類似した状況を呈する（以上は水没予定地域内に限っての観察である）。なおこの地域は天水農耕地帯で、台地上の平原には小麦・大麦などが栽培されており、筆者等が訪れた6月には、収穫したばかりの大麦と小麦の集積をいたるところで見ることができた。

この付近での最大の町はトゥズ（ドーズとも発音する）で、交通の要衝にあたり、物資が集散する。人口は不明だが1万人以上に達すると思われる。トゥズにおける民族構成はクルド、トルクメンが主で、アラブ人は少数である。水没予定地に接し、我々が宿舎としたザンジャリーヤ村は、戸数140戸の中規模の村で、民族構成はトゥズ付近とはほぼ類似する。ほとんどの村では生活飲料水は共同の掘抜井戸を利用しており、定時的にモーターで汲み上げていた。村や農耕地で利用する井戸の水位は、地点により大きな差があり、地下の褶曲が小地形的であると推測できる。また季節を限って利用される放牧のための村落が、テル・ムディョーナの対岸に存在していた。このことは天水農耕の実態と併せ考え、古代遺跡の分布や性格を追及する上で看過できない資料といえる。

水没予定地内および付近の遺跡

水没予定地内で調査が終了した遺跡はテル・カーヌーン Kanun で、後期イスラム時代の遺跡であったという。調査継続中のテルはショーク1号丘と2号丘で、考古総局の Kamel Alwan Shihab 氏が担当している。今回の我々の調査では、氏に大変お世話になるとともに、多くの教示を得た。

テル・ショーク 1 ザンジャリーヤ村の南約5Km、トゥズ川西岸の段丘上に占地し、西側には侵蝕され独立丘状を呈する比高差約30mの台地が150mの地点に迫っている。テルは径約30m、高さ約2.5mの円形

である。確認された遺構は、厚さ 1.5 m ほどの同心円壁を 3 重に巡らせ、中央部に径 4 m の部屋／空間を有する円形建物であった。壁と壁の間は数箇所て仕切れられ、部屋状となったり、あるいは回廊・通路として利用される。最も内側の回廊の 1/3 周は、回廊の中央線上に薄い壁が巡らしてある。おそらくこの部分には二階もしくは屋上に達する階段が施設されていたのであろう。回廊床面の数箇所にはビット状の落ち込みが存在する。出土遺物は土器、石器、骨角器、装身具、紡錘車、テラコッタ像などである。特に土器では緋色土器 *Scarlet ware* が回廊部分から多量に出土しており、この建物が初期王朝 I 期（以下、ED I 期と略記する）の構築であることが判るとともに、ハムリン盆地のグッパやラズークで検出された円形建物との関連で注目される。装身具にはカーネリアンやペルシア／アラビア湾産の貝製ビーズに加え、グッパで注目された“直角孔形ペンダント／ビーズ”〔井 1989〕が多量に出土した。このほか典型的なウルク／ジャムダト・ナスル様式の円筒印章、プロケード様式の円筒印章、亀甲形でドリル技法による印面をもつスタンプ印章など 4 点が出土した。

テル・ショーク 2 ショーク 1 号丘の東約 150 m に存在する。長径約 50 m、高さ約 3.5 m の楕円形のテルである。調査は中央部の 6×20 m の範囲で、極く最近 Kamel Alwan 氏によって開始された。イスラム時代の墓が表層直下のウルク期の層をほりこんでいる。現在確認されつつある遺構は日干煉瓦造の住居跡と推定され、方形の区画（部屋）が出現しつつある。出土遺物は土器、石器、メイス・ヘッド、焼成土鎌などである。土器はウルク期に特徴的な灰／黒灰色磨研土器や赤色磨研土器と共に、粗製の傾斜口縁ボウル *Bevelled rim bowl* が相当数出土している。注口土器、片口碗、カリネイテッド・ボウル（図 2—7：以下に示す番号は図 2 中の遺物ナンバーである）、磨きを施した浅い大型のボウル（6）、荒い刻文のある大型壺、単彩土器、ストラップ・ハンドル壺（5）、穿孔された 4 耳土器、肩部～胴部に斜め方向のリザーブ・スリップを施した壺（1）などが集中していた。注口土器では注口先端の上部を三角形に切り裂いた例〔Starr 1937, 39: Pl. 50-H〕が顕著である。伴出した焼成土鎌は、石器素材の入手が容易な地域であるにも拘わらず、南メソポタミア的な道具であり、この点、南・北メソポタミア文化の接触を示すうえで、示唆に富む遺物といえる。なおショーク 1・2 周辺は平坦ではあるが、長さ約 400 m、幅約 200 m の範囲に限って農耕地としても利用されておらず、この範囲に当時の集落を想定することも可能と思われる。この未利用地内ではウバイド式土器も採集できたので、おそらくウルク期に先行する遺構が確認できるであろう。図 2 に示したテル・ショークに関係する遺物は、発掘担当者の了解を得て付近から採集し、実測したものであることを付記しておきたい。

テル・ムディーナ テル・ホデイルともいう。ザンジャリーヤ村の南約 8 Km、ダーコーク川の北岸に存在する。遺跡までの道路状況は悪く、ザンジャリーヤ村から車走約 30 分、徒歩 20 分を要する。遺跡は氾濫原から 10 m の高さを測る段丘上にある。背後には深く切れ込んだワディと、侵蝕をうけた台地の縁部が数十 m の高さでそびえ立つ。テルは二つの丘からなり、主丘は径約 50 m、高さ約 4 m を測る。表層には近・現代の遺物が散布するが、その下層はウルク／ジャムダト・ナスル～ED I 期と推定でき、赤色の彩色を施した短頸壺（8）、ウルク後期的な内外面を磨研した大型のボウル（9）、大型壺（10）などを採集した。

主丘の南約 50 m の川側には、長さ約 40 m、幅約 15～20 m で、高さ 50 cm ほどの低いテルが存在する。ここでは微細な銅片と共に、刻文土器を中心とした遺物を採集した（11～14）。このなかには後期ウバイド～前期ウルクと推定できる土器片（12, 14）も含まれており、遺跡の時代は主丘よりさかのぼる可能性もある。刻文土器はいずれも壺形土器の肩部破片と思われ、格子、ジグザグ、波状、平行線などを認める。石製の鎌刃（16）も量は多くないが採集できた。

テル・アッパースとリヤース ザンジャリーヤ村の北約 1 Km に存在する。図 1 にはアッパースのみを記したが、本来は二つのマウンドで構成され、西側がアッパースで径約 30 m、高さ約 1 m、東側のリヤースは径約 30 m、高さ約 1.5 m を計測する。採集遺物はボウル (17~19)、リザーブ・スリップのある壺 (20)、外反する口縁部を特徴とした壺 (21~25)、コニカル・ボウル (26)、刻文土器 (27)、高杯 (29)、石製鎌刃 (28) などである。このほかにも実物を見ることはできなかったが、白色石灰岩製で複数の魚を配したウルク／ジャムダト・ナスル様式の円筒印章が表採され、イラク博物館に保管されているという。遺跡の年代は円筒印章が示唆する時代までさかのぼると推定できるが、高台付壺 (30, 31) や、高杯の脚部形態は初期王朝 III 期 (ED III) / アッカド時代的である。土器 21, 24, 25 についても、ウルク後期頃の遺物とするよりは、むしろ ED III / アッカド時代に帰属する可能性が強い。とすればハムリン盆地内で確認された同時代の遺跡や、ヌジ遺跡のガ・スルとの関連で注目される。いずれにせよこの遺跡には、前 4 千年紀後半から前 3 千年紀中頃にかけての遺構の存在が予測される。

テル・シャイル アブ・ヘルザともいう。水没予定地付近で最大のテルで、恰好のランドマークとなっている。当初水没予定であったが、計画変更により回避される可能性がでてきた。最大長は約 600 m、最大幅約 500 m、高さ約 20 m を測り、中央部は幅約 100 m の凹地・谷状／オープン・スペース (?) となり、テル全体の形状は馬蹄形をなす。遠方より望見すると二段に積み上げられた丘であることが分かる (テルが巨大なため計測は概略であり、車の走行メーターを使用した)。テルの北側部分が高く、面積も南側の倍以上を有する。表面採集した遺物から、テルの構成時代はイスラム、新アッシリア (?), カッシート、前期ウルク〜後期ウバイド、およびハラフ期と考えられ、特にカッシート時代の遺構面積は比較的広範囲におよび、ここに大規模な街区を想定できる。即ち、北側部分の上部の高まりは前 2 千年紀中頃以降に形成されたとみなし得る。この下部にはウルク期以前ハラフ期にさかのぼる遺構の存在が予測でき、新石器時代〜銅器併用時代にかけての集落が馬蹄形に展開していたと思われ、その面積はおよそ 20 ha 程を占めた、と想定している。つまり、このテルは新石器時代以降この地域における中心的な集落であり、調査を行えばこの地域のほぼ全時代の歴史を包括する可能性もある。

テル・マリンデス ザンジャリーヤ村の北西約 20 Km、ズゲイトゥーン川の東岸にあり、川からおよそ 1 Km 離れた低い河岸段丘の端部に占地する。遺跡は径約 100 m、高さ約 7 m でほぼ円形をなす。表層にはイスラム (イルハーン朝) 頃の遺物や、新アッシリア (?) と考えられるもの、石器および銅片などが散布しており、比較的多くの時代を包括した遺跡であることがわかる。イラク考古総局が行った事前調査では、ウバイド、ハラフ式土器も採集されたといわれるので、ハラフ期までさかのぼる遺跡とみなし得る。ただ遺跡に到達する道路状況は悪く、調査には相当の困難が予想される。

テル・セチン テル・ンジンともいう。トッズ川を挟んでザンジャリーヤ村の対岸にある。この付近での川の水深は浅く、よほどの降雨でもないかぎり、通常は車・徒歩で渡河できるという。従って相当古い時代から、ここが渡河地点として利用されていたと考えてよい。テルはトッズ川東岸の段丘上にあり不正形をなす。最大長約 200 m、高さ約 20 m で、立ち上がりは比較的急である。ザンジャリーヤ村側は急峻な崖状をなしており、この部分がしばしば濁流によって洗われたことを示唆する。川側に認められる大型の日干煉瓦を使用した厚く高い壁は、洪水に対する備えとなっていたのであろう。多量に散布する遺物からバルティア時代頃の遺跡と推定され、立地、テルの形状などと相まって、城塞的な性格を暗示する。なおテルの背後には長さ約 50 m、高さ約 1 m の小さな別のテルが存在した。

このほか水没予定地内で遺跡として登録されているが、現地確認ができなかった例としてテル・アチュファール（川岸に存在する）、テル・ミール（トッズ川の東岸、テル・セチンの下流にあり、ワディに侵蝕されつつある）、カラ（現在も居住者がいる）などがある。また周囲の平原地帯、特にカラジ山とハムリン山脈との間の平原には、数十基に達する大小のテルが点在しており、その分布密度は現在の集落数をはるかに超える。

まとめと展望

この地域はハムリンに連続する平原であり、共に酷似した自然環境と風土をもち、ほぼ同一の文化圏に属すると考えてよい。このほかに我々が注目するのは、この地域が考古学的にまったく未調査地域であるからである。比較的近い調査遺跡として、1925～1931年にわたり American School of Oriental Research によって発掘されたキルクーク南西 13 Km に位置するヨルガン・テバ（ヌジ）があるが、報告書はアダイム地域に関する僅かな情報さえも提供してはくれない [Starr 1937, 39]。1938～1965年にかけて行われたイラク考古総局による、イラク国内の遺跡分布調査は、ほぼ全土をカバーするものであった。この調査を担当した元イラク考古総局の Behnam Abu al-Soof は、分布調査の成果を踏まえた上で、アダイム周辺地域にも触れ、特に銅石併用期の遺物に注目しつつ多くの指摘を行った [1968: 74-86]。しかしながら彼の分布調査の足跡を仔細に検討すると、ズゲイトゥーンおよびダーコーク川上・中流に関しては、実際、分布調査が行われたとみなし得るが、今回のダム水没予定地域を踏査した形跡はなく、メソポタミアでも大型の部類に属するテル・シャイルさえも見逃されている。最近出版されたメソポタミアの考古遺跡地図でも、Behnam 氏の指摘に沿う分布と時代区分が踏襲されており [Finkbeiner and Röhlig 1988: B II 7]、特にニネヴェ 5 期と ED I 期の関係など、依然として多くの問題を残している。つまりハムリン盆地の北から、キルクークの南にかけての約 100 Km 四方の地域は、殆んど未調査地域と言っても過言ではない。このようなことから我々は、既にハムリン遺跡調査中から、この地域に大いなる関心を寄せていたのである。

テル・ジョーク 1 で検出された ED I 期の円形建物は、構造的にはハムリンのテル・グッパとラズーク [Gibson ed. 1981] の中間形態をもち、時期的にもほぼ中間（グッパ V 層併行期頃）に相当すると推定できる。しかしながら発掘調査は建物の完全な基底部を明らかにしておらず、調査の進展次第では、よりさかのぼる可能性も秘めている。現時点で円形建物の構築順序は、グッパ VII 層→ジョーク 1→ラズークと位置づけることができるが、その機能や性格に関しては統一した見解を得るまでには至らない。ハムリンやアダイム地域を含む東北イラクの ED I 期文化圏では、円形建物を中核とする社会が形成されていたことは確かであり、その性格や機能の究明は当時の社会形態や、経済活動、あるいは対外関係などを明らかにしてくれるであろう。ジョーク 1 の円形建物からは比較的多くの彩文土器が出土しており、それらは明らかに紅色土器の範疇に属し、ハムリンとの緊密な関係を窺わせるに足る資料である。彩文の特徴はハムリンの当該種に比べ、若干の地方色も認められるが、基本的にはほぼ同じであり、北に展開するニネヴェ 5 期文化の影響は少ないとみなし得る。出土状況や遺物の種類もほぼグッパに共通しており、およそ 75 Km 離れた二つのテルの間に強固な関係が存在したことを明らかにした。また、現在問題となっている南メソポタミア的なジャムダト・ナスル文化の北への波及範囲についても、ジョーク 2 やムディーナの調査が行われれば、何等かの解決が得られると考えている。そのことは南・北メソポタミアに開花したウルク文化の研究にも直接関係し、大きな示唆を与えるであろう。

我々の研究課題は、メソポタミアにおける前 4 千年紀中頃から前 3 千年紀中頃にかけての文化（ウルク～初期

アダイム地域表面採集遺物 観察表

遺跡	番号	器種・種類	法 量(mm)	器 形 の 特 徴	成・変 形 と 調 整	胎土中の混和剤	焼成・色調	そ の 他 備 考
テル・ シヨ ーク2 周辺	1	壺	口径 128	ゆるく外反する頸部。口縁部は三角 形。肩はなだらか。	紐土成形。内外頸～口縁部はロクロ利 用のナデ。肩部内面ケズリ。外面は斜 方向のリザーブ・スリップ。	微量の細砂と 細いスサ	良好 ピンク色	スリップは緑色であった淡黄褐色。
	2	壺	口径約 145	頸部はほぼ直立。口縁部は大きく 外反し、内湾気味に終る。	ロクロ成形。内外面にロクロの痕跡を 残す。	細砂と細いス サ	良好 クリーム色	外面に淡黄褐色のスリップ。
	3	壺	視定口径： 88(?)	口縁部は「く」の字形に開く。	輪積成形のちロクロで仕上げず。肩部 以下と口縁部を接合する。	混入物を認め ず	良好 ピンク色	外面に淡黄褐色スリップ。
	4	壺	口径 150	頸部と口縁部が一体化し、外反す る。	紐土成形。頸部以上にはロクロの痕跡 を認める。肩部内面はケズリ。	細砂と細いス サ	良好 クリーム色	外面に淡黄褐色スリップ。
	5	把手付壺		本体不明。把手は中央が僅かに凹 む板状ハンドル。	ハンドルは紐土成形。全面ナデ。	細砂と小礫	良好 クリーム・ピンク色	ストラップ・ハンドル壺(?)。把 土部分の胎土は本体より荒い。
	6	ボウル	口径約 320	比較的大型で、口縁は尖り 気味に終る。	成形不明。内外面はミガキ。	多量のスサ	良 赤褐色	いわゆる「ウルク赤色磨研土器」。
	7	ボウル	口径 110 最大径 125	口縁部は水平に近いきれがある。 底部と底部の境に接をもつ。	ロクロ成形。体部外面横方向のミガキ。 底部はケズリのちナデ。	混入物を認め ず	やや甘い クリーム色	カリネイテッド・ボウル。内壁面 が円形に割製する。
テル・ ム デー ーナ	8	短ノ須臾 (彩文土器)	口径約 110	直立する形式の頸部。肩は強く 張る。4耳土器(?)。	ロクロ成形。	微量の細砂	良好 クリーム色	外面に淡黄褐色スリップ。頸～肩 部の一部に遺赤色の彩色を認める。
	9	ボウル	口径約 280	口縁部は内湾気味に終る。	成形不明(ロクロ仕上げ?)。内外面丁 字なミガキ。	微量の細砂と 細いスサ	良好 淡赤褐色	定形品には低い貼付高台が伴う。
	10	壺	口径 200以上	「く」の字形の厚い口縁。	ロクロ成形。内面に水痕がある。	細砂	良好 クリーム・ピンク色	大型土器破片。外面に淡黄褐色ス リップ。
	11	壺 (刻文土器)		肩部破片。	ロクロ成形(?)。外面からいミガキの ち刻文。	混入物を認め ず	良好 赤褐色	外面淡黄褐色スリップ。甕状具に よる斜格子の輪刻。
	12	壺 (刻文土器)		肩の上部にかすかな横がある。	成形不明。肩部に木炭灰(?)を押し 当てたジグザグの刻文がある。	細砂および黒・ 赤色の小礫を比 較的多く混入	良好 ピンク色	頸部復元径約100mm。
	13	壺(?) (刻文土器)		ほぼ平らな肩部(?) (破片)。	成形不明。内外面ナデ。6条以上の歯 をもつ櫛状具による並行線と波状文。	細砂	良好 クリーム色	
	14	壺 (刻文土器)		曲面をもつ破片。	紐土成形。櫛状具による並行線。	細砂	良好 クリーム色	後期ウバード～前期ウルクの可能 性あり。
	15	器形不明		上部はどげ大きい。	ロクロ成形。	相当量の細い スサ	良好 淡緑黄褐色	
	16	石製鎌刀	長42、最大幅 20、厚さ6		使用による刃こぼれ。両端部をリタッ クする。			灰白色フリント。
テル・ アッ パース/ リヤ ーリス	17	ボウル	口径約 120	器壁は薄く、口縁は尖り気味。	ロクロ成形。内外面はロクロ利用のナ デ。	細砂	良好 クリーム・ピンク色	コニカル・ボールと考えられる。
	18	ボウル	口径 250	中～大型で、器内は比較的厚い。 口縁は丸く内湾気味に立ちあがる。	ロクロ成形。内面および外面上半部は ロクロ水挽き。外面下部はケズリ。	細砂と細いス サ	良好 クリーム色	
	19	ボウル	口径約 260	器形は№18に類似。口縁部は方形 をあげる。	ロクロ成形。外面水挽き。内面なで のちらうミガキ。	細砂	良好 淡黄褐色	
	20	壺	現存最大径 115	比較的丸味をおびた肩部。	ロクロ成形。外面肩部には水平方向 のリザーブ・スリップあり。	細砂を多く混 入	不良(甘い) クリーム色	
	21	壺	口径 140	「く」の字形に外反する口縁部。	ロクロ成形。全面ナデ。外面肩部付近 はリザーブ・スリップ状となる。	細砂	良好 ピンク色	スリップは淡緑黄褐色。
	22	壺	口径約 140	口縁部の形態は基本的に№21に同 じ。肩上部にかすかな横がある。	ロクロ成形。肩部外面ケズリ。他はロ クロによる水挽き。	多量の細砂	良好 ピンク色	外面ケズリのち淡緑黄褐色スリッ プ。
	23	壺(?)	不明	口縁部は外傾し、中央が僅かに凹む。	ロクロ成形。	多量の細砂	良好 ピンク色	
	24	壺(?)		上端が鋭く尖った三角形の口縁。	ロクロ成形。	細砂	良好 ピンク色	
	25	壺(?)		外傾した三角形の口縁。	ロクロ成形。	細砂	良好 淡赤～ピンク色	
	26	ボウル(?)		円錐形の体部と平らな底部。	ロクロ成形。底部は糸切りのちナデ。	細砂と微量の 小礫	良好 ピンク色	
	27	不明 (刻文土器)		部位不明	成形不明。外面に並行する3条の線刻。 内面はケズリに近いきズリ。	細砂	良好 クリーム・ピンク色	外面淡緑黄褐色スリップ。
	28	石製鎌刀	長60、最大幅 21、厚さ8		未使用(?)。			灰色フリント。
	29	高 杯(?)	脚部径約 200	増部は三角形で鋭い。	ロクロ成形。	細砂	良好 淡緑色	外面スリップ有か。
	30	高台破片			貼付高台。接合後ロクロを利用したナ デ。	細砂	良好 ピンク色	外面クリーム色のスリップ。
	31	壺(?)	高台径 130	台は高く、大きく広がる。	本体ロクロ成形。貼付高台。外面は高 台接合後ロクロ利用のナデ。内面はケ ズリ。	細砂と細いス サ	良好 ピンク色	

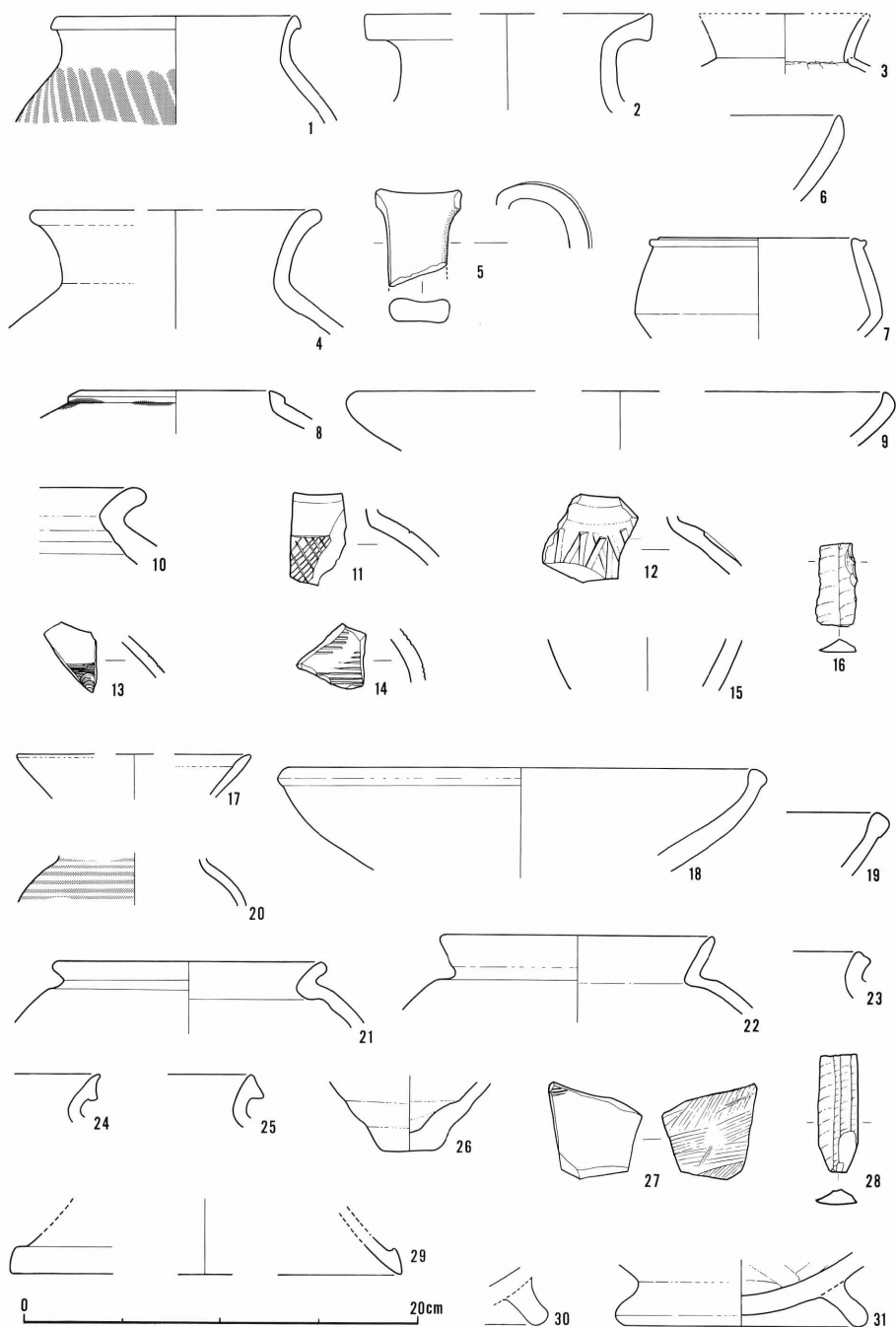


図2 アル・アダイム地域表面採集遺物（ショーク2周辺：1-7，ムディーナ：8-16，アッパースとリヤース：17-31）

王朝期)の把握であり、対象地域として特に東北イラク地方を重視している。というのも、この地域は、数千年にわたって独自に展開する南・北メソポタミア文化の接触地帯とみなされ、北と南からの影響を受けつつ独自の発展を遂げた地域だからだ。したがってまず、我々はこの地域の調査を通して、上記した時代の土器を中心とした正確な編年を確立したいと考えている。そして当時の社会形態の復元に取り組みたいと思っている。

今回の予備調査は短期間ではあったが、多くの新知見を得ることができ、この地域の重要性を再認識した。我々はイラク考古総局にテル・ショーク地区の合同調査を打診している。それは既に述べた多くの問題点を解決できる可能性を持つ数少ない遺跡であるからである。ハムリン盆地の考古学調査が多くの新事実をもたらしたように、アダム地域の遺跡はそれ以上の情報を提供してくれると期待している。

(1990.7.15)

参考・引用文献

Abu al-Soof, B.

1968 Distribution of Uruk, Jamdat Nasr, and Ninevite V pottery. *Iraq* 30: 74-86.

Finkbeiner, U. and Röllig, W.

1988 *Tübinger Atlas des Vorderen Orients, Mesopotamien · Frühdynastische Zeit* B II 7: Dr. Ludwig Reichert Verlag · Wiesbaden.

藤井秀夫編

1981 特集記事, イラク・ハムリン発掘調査概報『ラーフィダーン』2: 1-242.

Gibson, McG. ed.

1981 *Uch Tepe 1, Tell Razuk, Tell Ahmed al-Mughir, Tell Ajamat* (Hamrin Report 10): Chicago and Copenhagen.

井 博幸

1989 テル・グッパ出土の遺物: ビーズ・ペンダント・環, ガラス製品, 紡錘車, 金属製品, 骨製品『ラーフィダーン』10: 167-243.

Starr, F.R.S.

1937,39 *Nuzi, Report on the Excavations at Yorgan Tepe near Kirkuk, Iraq*: Harvard University Press.